

発達障害児の視点取得を促すプログラムの検討

Examining the Programs that Improve Perspective-Taking for Kids with Developmental Disorders

杉本 拓哉 (Takuya Sugimoto) 指導：大月 友

【はじめに】

近年増加傾向にある、通常学級に在籍する発達障害児は、そのコミュニケーション様式の特異性から友人関係の構築で失敗体験を積み重ねやすく、不登校のリスクを抱えていることが明らかとなっている（大塚・綱谷，2011）。教育現場では、SSTやSSEといった手法を用いてそうした状況に対応しているが、SSTやSSEは発達障害児が苦手とする視点取得の獲得を前提としたものであり、対象の児童・生徒によってはあまり機能しないという課題がある。また、視点取得については発達心理学領域においてそれほど新しい話題ではないにも関わらず、実践的な研究は始められたばかりである。そこで、本研究の目的は、不登校・不登校気味の発達障害児に対して、視点取得能力を向上させるためのプログラムを考案し、その効果を検討することとする。

【方法】

1. 対象者：関東にある知的障害児施設で行なっている不登校支援事業に参加している小学6年生の男女2名とした。
2. 実施プログラム：毎回1度のプログラム中に2種類の課題を行った。1つ目は文章読解課題として、Ruth et al. (2007) からランダムに選ばれた5問を行った。2つ目は、実際に2名が参加している集団活動場面の映像を使ったビデオフィードバックとした。使用する場面は、各対象児の視点取得能力が影響していると考えられる課題行動が現れている場面、もしくは上手に対応できている場面とした。また、それぞれの課題行動の程度を採点するためのチェックシートを作成し、ビデオフィードバックの際に使用した。手続きとしては、①担当スタッフと対象児が同じ映像を見て別々にチェックシートに記入し、②その後お互いの回答について意見を述べ、③次にもし同じ場面があった場合どのようにするとよいか案を出してもらう、こととした。
3. 研究デザイン・評価方法：単一事例実験法によるABAデザインを導入した。プログラムの効果検討は、読解課題の得点の推移、活動中に見られた課題行動の生起頻度、プログラム実施前後に行った母親への質問紙（対人コミュニケーション質問紙・VINELAND II・異常行動チェックリスト・こどもの行動チェックリスト）にて評価した。

【結果と考察】

読解課題は2名ともプログラム開始時よりほとんど満点

であった。課題行動の生起頻度はプログラム開始後7回目前後から低減した。母親への質問紙からは、2名ともコミュニケーション領域の得点が上昇、行動問題が減少、女児の異常行動が低減、といった結果が得られた。特に各対象児に設定した課題行動は、それぞれが持つ視点取得の未熟さが原因として考えられる行動であり、その生起頻度が減少したことは、今回のプログラムを通して、対象児の視点取得の状態を変化させることができたものと考えられる。また、プログラム終了後に行った母親へのアンケート結果から日常生活全般において行動上の問題が改善されていることが確認された。これらのことから、やはり今回のプログラムが対象児の視点取得能力の獲得・向上に影響を与えることができたものと考えられる。実施期間や頻度についても、ふりかえりチェックシートにおける回答の一致率や課題行動の生起頻度から、介入開始後7回目付近からプログラムの効果が現れ始めていることが読み取れ、プログラムの実施回数についても、概ね妥当であったと思われる。

なお、本研究の限界として対象児は2名とも不登校支援事業に継続的に参加していたため、本プログラム以外の影響を受けている可能性は排除できない。そのため、研究デザイン上の工夫をするなどさらなる検討の余地がある。

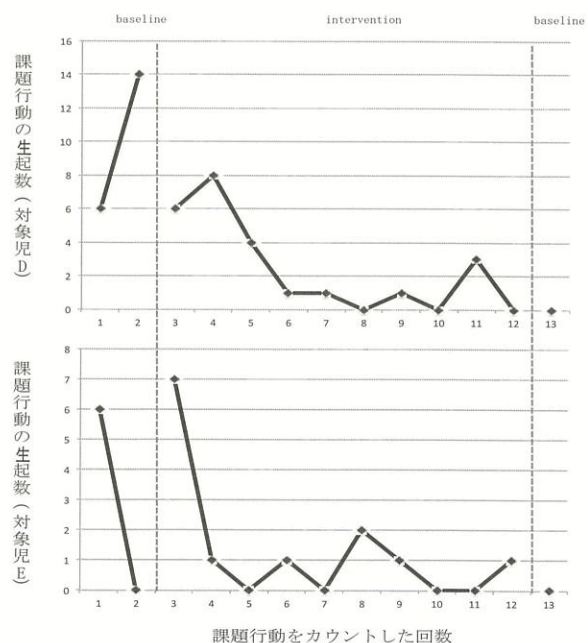


Fig. 課題行動の生起頻度